

【歴史に学ぶ(歴史は形を変えて繰り返す)】

戦国武将の家督相続から学ぶ事業承継

～失敗・成功の要因～

現在、事業承継が社会的に大きく取り上げられています。戦国武将の家督相続の事例は、良きにつけ、悪しきにつけ、企業の事業承継にも参考になります。ここでは、武田信玄、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の家督相続から、現代への教訓を学びます。



認定支援機関、中小企業診断士、
特定社会保険労務士
大塚教晃 氏
●プロフィール
オオツカ ミチアキ
「ブッシュ型事業承継支援強化事業」
の岐阜県地域事業責任者(承継コー
ディネーター)を務めると共に(株)東海
アソシアの代表も続けている。伴走型
の企業支援を旨としている。

1 戦国武将の家督相続

① 武田信玄から勝頼へ

甲斐・信濃をほぼ手中に収め破竹の勢いの信玄も嫡男義信の育成には失敗し、謀反を企てたのを機に切腹させ、四男勝頼を後継者にしました。しかし、信玄が急病死したこともあり、勝頼は偉大な信玄の影から逃れられず、無謀な経営戦略に走り、織田に滅ぼされました。



制を作りましたが、周囲への配慮の欠除と油断で、明智光秀のクーデター(本能寺の変)で織田家は瓦解しました。

② 織田信長から信忠へ

国内統一が見え始めた信長は嫡男信忠に家督を譲り、双頭体

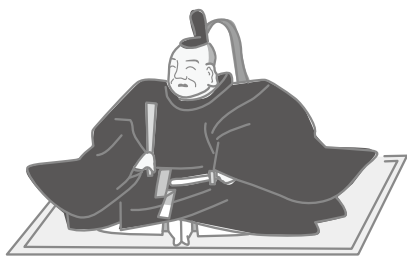
③ 豊臣秀吉から秀頼へ
天下統一を果たした秀吉は一旦、甥の秀次を後継者として関



白にもしましたが、実子秀頼の誕生を機に秀次一族を抹殺したので、幼い秀頼だけが残されました。弟秀長が病死、黒田官兵衛達を遠ざけ、石田三成の人望の無さもあり、豊臣家は徳川家康に滅ぼされました。

④ 徳川家康から秀忠へ

徳川幕府を開いた家康は、將軍職を嫡男秀忠に譲り、自身は大御所として諸大名に睨みを利かせて秀忠を支えました。また、本多正信などの有能な補佐役(右腕)を付けて二百数十年続く磐石な体制を構築しました。



2 家督相続の失敗・成功の要因

歴史として、武田、織田、豊臣の三家は家督相続に失敗して他家に滅ぼされ、最後に徳川家が長期政権を確立しました。その要因は沢山ありますが、先ず、次の3つが挙げられます。

① 後継者の育成(相続時期・年齢、教育など)

武田信玄は当初後継者と考えていた嫡男義信を切腹させ、四

② 補佐役・右腕の配置

武田勝頼の方針に対して、配下の武将達が「先代信玄公ならば…」との言に勝頼は悩まされました。豊臣秀吉は弟秀長が病死、晩年、黒田官兵衛達を遠ざけたので、周囲に石田三成しか残りませんでした。徳川家康は、秀忠に有能な本多正信を補佐役として付けて磐石な幕府を構築しました。

③ 利害関係者への配慮と布石

武田信玄からの忠誠指示が不十分だった故に配下の武将達が勝頼の足を引っ張る結果になりました。織田信長・信忠親子の同時死去後、強力な軍団武将達が織田家を瓦解させました。豊臣秀吉が秀次を中継ぎにしておれば、徳川家康の傍若無人の振る舞いを防げたかも…。これらを見てきた家康は幕府開設後、

3 現代の事業承継への教訓

戦国武将の家督相続の失敗・成功の要因から、次のような教訓を学ぶこともできるのではないのでしょうか。
① 適切な期間を掛けて計画的に後継者と補佐役(右腕)を育成する。

② 事業承継に関する自分の考えを後継者や利害関係者に対して十分に伝達する。

③ 承継後数年間、会長等としてサポートする。

歴史は、今を経営する者がより良い事業を展開するために、先人が遺してくれた経営の鑑(かたどき)でもあります。

* 史実は諸説があります。本文とは異なる説もありますのでご了承ください。
* イラストはイメージです。
本文は、ブッシュ型事業承継支援強化事業の一環として平成30年11月に実施しました城所弘明先生(公認会計士)のセミナーの一部を引用して筆者の考えを記述したものです(先生の了解取得済です)